文学史記述に関するメモ

１）「歴史的事件と文学」関連

分離独立など個別の歴史的事件と文学との関連を探るのも有意義だが、より大きな視点として（イギリスの）植民地という状況と文学という視点も必要ではないだろうか。インドにおける文学の「近代的」発展や「文学」という概念そのものはこの歴史的状況と切っても切れないものであり、そうした状況をインドの文学者自身がどのように見ていたか、ということを考えてみるのも重要かもしれない。具体的には、

① （独立運動に至る以前に）イギリスやその植民地下にあるという状況を文学者がどう考えていたのか、統一的なインド文化という概念がどのように立ち上がってきたのか、ということ。ベンガル文学では、タゴールの『ゴーラ』などが資料になりうる。

② 西洋との接触によるインド文学の「再発見」や「再構築」。インド古典文学に対する再評価はもちろん、たとえばベンガルでは中世ヴァイシュナヴァの作品群が近代以降「ロマン派的」な解釈をほどこされるようになったというような観点について。

③ 文学者の「英文学的」教養について。単に英文学の「影響」ということではなく、必然的にもたらされたこのような教養が、文学上の価値を変容させ、さらに個々の文学者の創作の場面にどのようにあらわれてきたのかにつて。

２）「語り」関連

「語り」の場を問うのか、語られた内容を問うのかによって異なってくるだろうが、単純に口承文芸として考えた場合、ベンガルのチョラ（ナンセンス詩の一種）は取り上げてみるとよいのではないか。

３）「映画」関連

今回の文学史が一般の読者向けであることを考えると、人の目に触れやすい映画という項目は重要なものになるだろうが、逆に言えば、一般の人が見ている可能性のある作品は必ずなんらかのかたちで触れるという方針であってもよいかもしれない。そう考えるとショットジット・ラエ（サタジット・レイ）作品などははずせないものとなるが、単なる映画評になることなく、読者をより文学に惹きつけるためのなんらかの工夫が必要かもしれない。またショットジット・ラエは児童文学者でもあり、自身の子供向けの作品を映画化したものもある。前述のチョラにも関連してくるのだが、この「児童文学」という項目を立てるかどうかも考える必要があるかもしれない。（近代以前の「チョラ」は近代というバイアスがかかった際に「児童文学」に変容したと捉えることもできる）